

資料17

マーモセットの口腔内味蕾の分布と形態の
発達に伴う変化、山口京子・原田秀逸・金丸憲一・
笠原泰夫（鹿児島大・歯・口腔生理）

1日～9歳齢のコモンマーモセットの舌および軟
口蓋の完全な10 μ m厚連続切片を作成し、各部位
の味蕾の数、味孔の有無、位置、形状を記録した。

マーモセットの出生時の有郭乳頭および葉状乳
頭味蕾は、茸状乳頭および軟口蓋に比べて非常に
数が少なく、その後増加した。どの部位の味蕾数
も出生直後から増加を続け、2ヵ月齢までにピーク
に達した。味蕾総数はどの齢においても茸状乳頭
が最も多く、その次に多い軟口蓋味蕾数の2倍近く
にも達し、2ヵ月齢で茸状乳頭1069個、軟口蓋609
個、有郭乳頭（中央）530個、葉状乳頭（片側）
201個であった。軟口蓋味蕾は上皮内の島状の組織
中に存在し、中央部と左右両側に多く見られた。9
歳齢の軟口蓋味蕾数は248個で、同齢の茸状乳頭味
蕾数の1/3以下に減少した。味孔の開存率は、出生
直後の軟口蓋および茸状乳頭で急速に上昇し、3日
齢で軟口蓋74.8%、茸状乳頭61.9%となり、2ヵ月
齢までは軟口蓋味蕾の方が高かった。また、味蕾
断面の幅および高さの積は、発達に伴ってどの部
位の味蕾も出生直後から増加し続けたが、2ヵ月齢
以降に顕著な増加は見られなかった。

ラットに比べて胎生期間の長いマーモセットに
おいても、味蕾は出生後に発育し続け、基本的
にはラットと同様の傾向を示すことがわかった。一
方、本実験において、アカゲザルにおける他の報
告と異なり、2ヵ月齢以降では何れの部位の味蕾数
も減少する傾向が認められた。これは、老化に伴
う味覚感受性の変化と関連して興味深い。

資料18

チンパンジーとヒト幼児の粘土遊び
：クレーン行動
中川綾江（日本女子大・人間社会・教）

これまでのチンパンジーの粘土遊びで、
1個体（クロエ）のみに「クレーン行動」
が継続的に現れた。クレーン行動とは他者
の腕を操作して対象に関わる間接接触のこ
とである。この行動の意味を明らかにする
ため、ヒト幼児の粘土遊び行動を検討した。
方法：

0-6才のヒト幼児約200名について6年
間撮影したビデオ録画を分析した。

結果と考察：

1-1.5才の複数の幼児がごく短期間、集
中的にクレーン行動を出現させた。つまり
遊びの初期、1回または2回の実験内に頻
繁に現れるが、その次の実験回では消滅し、
かわって自分の手で触るようになった。子
どもは新奇の物を提示された場合、他者の
手を掴んで対象に代理に接触させ、他者が
どうかかわるか行動を観察したのちに、自
分で直接接触するという過程が示された。
クレーン行動は粘土遊びの初期、発達段階
の過渡期に現れることが分かった。ヒトで
クレーン行動が出現する時期は粘土を口
に入れたりしゃぶる行動が消滅し、かわって
手による操作が発達する時期でもある。

人的環境で生育したクロエにクレーン行
動が継続して出現した。今後、同様の環
境にある他のチンパンジーに、ヒト1-1.5才
に対応する行動が出現するか検討したい。